

融合と進化

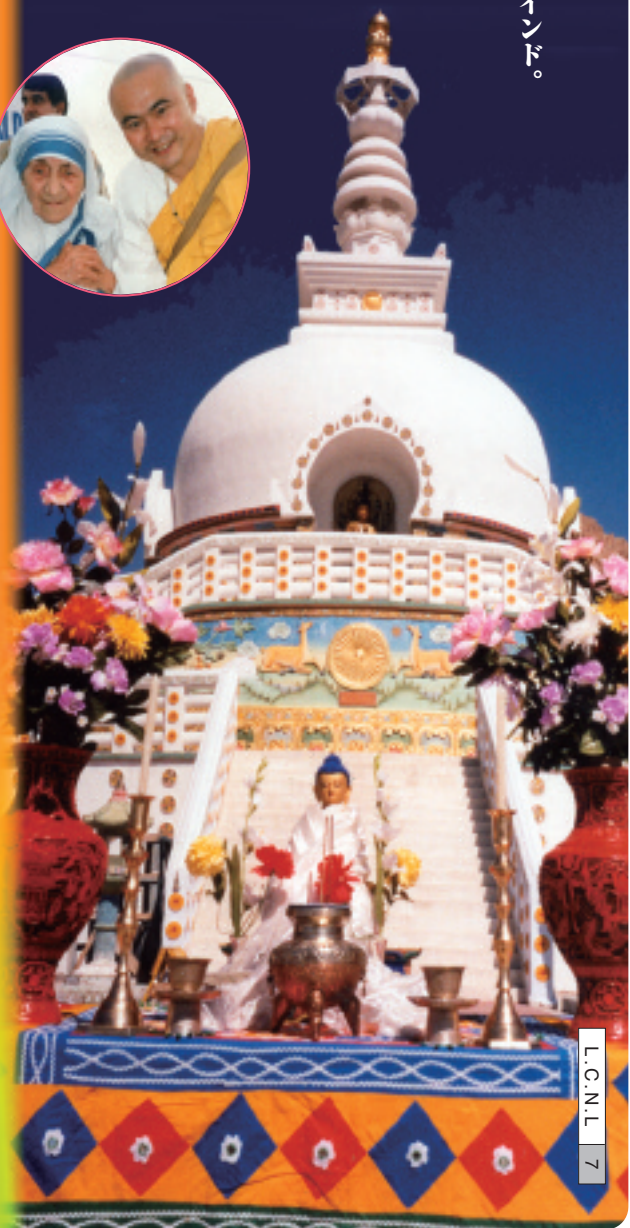
中村行明 (なかむら・ぎょうみょう)
1954年、東京都生まれ。世界放浪ののち、1975年
インドへ。藤井日達上人のもとで出家得度。マザー・
テレサやダライ・ラマらとともに平和活動に従事
した後、ラダック、マナリ、デリーに仏舎利塔や寺
を建立。近年は「スマトラ沖地震」の被災地を巡る
など巡礼僧を続けながら、日本とインドの文化の
架け橋として活躍している。ブッダ会会長。著書に
『たましいの童話集』がある。

ブッダ会会長 修行僧
中村行明さん



多重化するアイデンティティ

近年、著しい経済成長を続け、注目を集めているインド。
その国に31年間住み、
変化をつぶさに眺めてきた日本人の高僧がいる。
インドに三つの仏教寺院を建設した修行僧、
ブッダ会会長の中村行明さんに、
ひとつの寺に留まらない理由、
IT分野におけるインドの発展の要因、
善悪が明確に見えない時代の視点、
変化の激しい時代の生き方などを問うてみた。



ブッダ会
<http://www.h2.dion.ne.jp/~shanti/>

世界仏教徒センター
<http://www.indiamart.com/worldbuddhistcentre/>

中村さんが地元の人たちと建てた仏舎利塔ラダック・シャンティ・スーパ。[山を削る際に出た石を運ぶ作業を、ラダックの人々がボランティアで担ってくれました。建設費は地元の人々の寄付とインド軍の支援、日本からの支援は私に対する寄付でした](中村さん)ラダック・シャンティ・スーパで開かれる祭典には多くの地元住民が集まる。



写真上/交流の深いダライ・ラマと一緒に祈りを捧げる。「インドにいるチベットからの亡命者とはずっと交流があります。同じ仏教徒だから」(中村さん)。写真右/マザー・テレサとともに活動していた頃の中村さん。



インドに三つの寺院を建てた日本人

「ヨーロッパからインドに向かう陸路が“ヒッピーロード”と呼ばれた時代がありました。多くの若者がそこに何かがあると思い、インドへ向かったのです」

そう語る中村行明さんは、大学に入学生たものの、世界放浪に出かけ、1975年インドにたどり着いた。いろんな施設に宿泊しながら仏教に目覚め、出家した。

「私と一緒に修行した人が百人以上いましたが、ヒッピー生活や放浪生活をしながら、しばらくお寺で過ごすという人が多く、お坊さんになったのは私くらいでした」やがて北インドの地域の住民から「地元

に寺を建ててほしい」という要請を受けた中村さんは、その後十数年の時間を経て、ヒマラヤに近いラダック地区(ジャム・カシミール州)に寺院を建てることになる。地元の人々の寄付や軍隊の協力を得て1991年、仏舎利塔「ラダック・シャンティ・スーパ」が完成した。

その後、マナリ、デリーにも寺院を建立する。しかし、それらの寺院の運営を内弟子に任せ、自らは修行僧として世界各国を歩いてきた。

「お寺の運営を担うと、とても偉いお坊さんになってしまうのです(笑)。そこにいると居心地がよすぎるので、それは危険だなと思って、運営を弟子に任せました。

デリーやラダックの名士になると、大きな催しに来賓として参加しなければいけません。私は世界中を旅したいので、ひとつの場所に留まることに抵抗があったんです」

中村さんは、今日まで仏教に惹かれてくる理由を次のように語る。

「常識が逆転するような時代の波に洗われても残っていることです。仏教、キリスト教、イスラム教など基本的な宗教には、すべてそのなかに倫理・道徳も含まれています。時代の変化に対応できると同時に、時代の変化に左右されない普遍的なものも含まれているから、生き残れたのではないかと思います」

インドがIT分野で開花した理由

最初にインドに赴いた1975年、中村さんはデリーの街角でこんな光景を目にしたという。

「代書屋のオフィスに50~60台のタイプライターが並び、タイピストが申請書などの書類をきれいな英文で間違えずに打っていました。文書は数分で完成しました」

当時のその様子は、現在のIT先進国インドの姿と重なる。

「その頃からインド人は潜在的なパワーを宿していたのです。インドがIT大国となった要因のひとつに、一般人のそのような

スキルの高さがあります。タイプライターにインターネット回線が繋がり、ディスプレイがついたと考えると納得できるでしょう。

ですからインドが急に進化しはじめたというより、インド人がインターネットによって、本来もっていた能力を活用できるチャンスを得たということです」

そしてインド人の強みに言語を挙げ、外来語の取り入れ方と情報技術の関係性にふれる。

「インド人の強みは、英語を操れることです。多民族国家ゆえに多言語国家なので、どこの地方の言葉を優先してもその地方の言葉が優位性をもってしまう。そこで英語を共通語にせざるを得なかったのです。

たとえば『このスクリーン上のサインをマウスで左クリックして、ブラウザを開けてください』という内容の英語を、インド人はすぐに理解できたわけです。英語のIT用語を全部日本語に翻訳しなければいけないという概念にとらわれず、日本人だって仕事ができなくなりますよね(笑)」

中村さんは、インターネットを次のように活用している。

「インドでは日本の新聞のインターネット版をじっくり読みます。ですから日本に住んでいる人よりも多くの情報を知っているかもしれません。日本にいると、反対にインドのことが気になるから、インターネットでインドの新聞を読むのです(笑)」

その時代の善悪を見極める眼

世界を巡る宗教者の眼から見た世界の紛争、その時代の善悪を見極める眼を問うてみた。

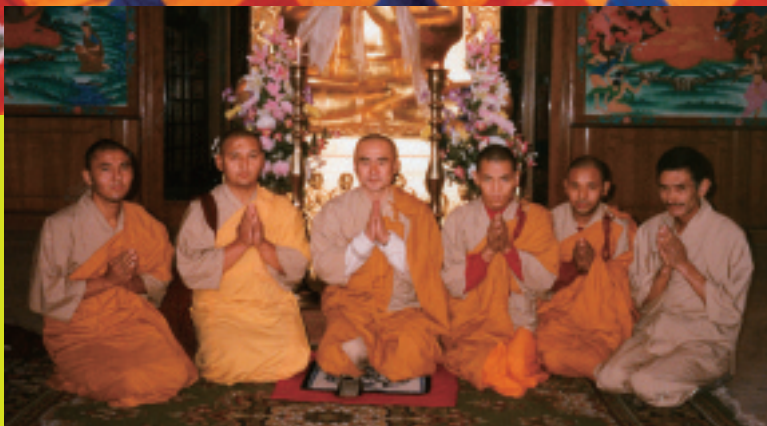
「時代善、時代悪と表現しますが、かつて許されていたあだ討ちは、現在では殺人罪になります。戦時中に非国民と呼ばれた一部の人たちが、戦争が終わるとヒーローになったのは少し前の時代のことで、現在でも同じことが起こっています。時代の善悪は刻々と変わっているようです。ですから、その時代の善悪を『絶対悪』『絶対善』と見ないほうがよいですね」

さらに個人では対応できないダイナミックなうねりに言及する。

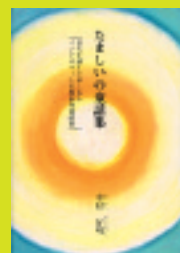
「そもそも『人を殺めない。人を欺かない』といったことは倫理・道徳観として、個人のなかにあるものなので、善悪は個人の判断で比較的わかりやすいのです。でも、国や社会自体が悪い方向に向かっているとき、個人はそれを判断できないこともあるのです」

経済成長を最優先に掲げた時代をたとえに挙げる。

「日本の企業が日本の住宅を安くするために、ある国の森林を伐採し、壊滅状態にしたという事実があります。だからサラリーマンとして真面目に働いていた人が知らないうちに加害者になっていることもあるわけです。みんなが同じ方向に向いていてどうすることもできないときは、小さな善が消えてしまうのです」



約20名の弟子に囲まれる中村さん。
約20名の内弟子がインドにいる。



たましいの童話集
探求社 2,300円(税込)

インド、チベットの精神文化にふれ、貴重な体験を積み重ねてきた中村行明さんが、現代の混沌とした世界に立ち向かう子どもたちに仏教の真理の一端を知らせるべく上梓した、インド・チベット仏教創作童話集。

そして日本人のアイデンティティーに着目する。

「自分たちがどこへ向かっているのかを知ることは大切ですが、日本人の問いで多いのは『日本は世界からどのように思われているのか』といった、日本人を視点にしたものです。

インド人は、インド人論や『我々インド人のアイデンティティーとは』とかいったことを語りません。日本人のアイデンティティーが揺らいでいるから、日本人はかくあるべし、といった日本人論が盛んになっているでしょう」

国と個人のアイデンティティーの多重化

中村さんは「多重化」というキーワードを挙げて説明する。

「現在、国も個人のアイデンティティーもどんどん多重化しています。たとえばマックユーザーやウィンドウズユーザーというくりが国を超えているように、日本人も国籍だけで固まらなくなってきています。

仮に近い将来、日本企業がインドや中国の

系列企業になったとき、ユーロのような統一通貨が生まれるかもしれません。ですから、いま考えている国家という概念をもとに話を進めるのは好ましくありません」

現在世界各国で起こっている暴動が、近い将来日本でも起こりうる可能性にもふれる。

「いま日本で働いている中国人、インド人、アラブの人の若者たちが日本で結婚して、子どもが生まれたとしましょう。日本人の子どもたちは、彼らを差別するかもしれません。20年も経てば、差別されてきた子どもたちの暴動が起こるかもしれません」

その一方で、どんな時代でもひとりの偉人が、社会的な大きなうねりをつくる可能性を秘めていることがある。中村さんは平和活動を通じて親交のあった故マザー・テレサの名を挙げて説明する。

「ローマ法王が豪華な法衣を着て、バチカンがものすごく男社会であったがゆえにマザー・テレサは、あえてインドの最下層しか着ないサリーを着て、女性だけの組織をつくった。

彼女が目目された理由は、権威とはまるっきり反対の方法でアプローチしたからでしょう。大きなパワーとなる活動は、逆説的なところを突いた人によって生み出され、時代の潮流に乗り、偉業につながるのでしょう」

では、「多重化するアイデンティティー」を自覚しながら時代の変化に敏感に対応し、変わり続けることが求められているのだろうか。

中村さんは、その質問に対して、最後に異なる視点を示唆した。

「変わることを拒まず、柔軟であることが賢明である、という見方を私は留保します。たとえば、インターネットや携帯電話で連絡を取ったりする、そういう時流に乗ることは社会的にはおそらく賢明でしょう。

でも、それらを拒否する美学があってもいいのです。ケイタイは使わないとかパソコンはいじらないとか。そういう人がいても許される社会であってもいいだろう、と私は思います」

Text by : 倉田 楽